

オブリエクシヨン162

不適切編

岡森 利幸

本編は、次の11項目からなる。(文中敬称略)
中には気が滅入りそうな事例もあるのだが、私
ことさら誇張したわけではない。

- ① 東京医大・不正入学の手法
- ② 親切的な詐欺グループ
- ③ 強制性交とは認められない
- ④ ドクターストップのかかった三浦雄一郎
- ⑤ 大坂なおみの肌の色
- ⑥ コーチを首にした大坂なおみ
- ⑦ 娘をいたぶり続けた父親
- ⑧ 大人たちに痛めつけられる子どもたち
- ⑨ アイドル少女をどやしつける
- ⑩ 南青山に児童相談所
- ⑪ 透析治療をしなかった福生病院

① 東京医大・不正入学の手法

以下は、新聞や雑誌記事の引用・要約。

【毎日新聞夕刊 2018/7/13 一面】

東京医科大学での不正合格リストを東京地検が入手した。鈴木前学長や副学長ら10人超で構成する入試委員会が合否を判断する仕組みだった。】

【毎日新聞朝刊 2018/8/3 社会】

東京医大、2011年以降女子受験生の点数を一律減点していた。】

【毎日新聞朝刊 2018/8/8 一面、クローズアップ、社会】
東京医大入試で不正加算(で合格したもの)が、2年間で19人。

動機については「同窓生から子弟の入学を増やすようプレッシャーがあり、寄付金も期待した」「(前理事長と前学長が)受験者側から謝礼を受け取ることもあった」】

【毎日新聞朝刊 2018/9/9 日曜くらぶ「新医学の真実・

米山公啓】

私立医大の経営問題が露呈した。大病院を併設しており、全体的な資金や人材確保が難しい。

裏口入学や女子受験生の点数を一律減点していたことが発覚した。一連の問題は今に始まったことではない。大病院側では途中で医者に辞められては非常に大きな問題になる。女医が外科や脳外科をほとんど選択しないことも、病院側には不都合なことになっている。

2次試験は面接なので入学を許可する側の裁量が大きく影響する。同窓生の子弟である受験生は有利になるが、同時に寄付金を要求されるのが普通だ。(その他、省略)】

【毎日新聞朝刊 2019/3/5 総合・社会

東京医大、第三者委員会は最終報告書を公表した。寄付金約束があったことが強く疑われると指摘する。白井正彦前理事長と受験生関係者との間に、優遇を依頼して合格すれば多額の寄付をするという暗黙の了解があったと推認している。】

寄付金が裏口入学に関わる謝礼の「後払い」になっているとは、なかなか考えたものだ。約束していたの

だから、当然、多額の寄付金が期待できる。受験者側と大学の間で、実質的に金銭の授受が行われたわけであり、学校側の不正加点は多額の寄付金目当てだったことになる。学生側としては、入学できるなら、多少の寄付金は払ってもいいという人たちが、理事長室に来ていたわけだ。

入学前にお金を払えば、怪しまれるが、後からの寄付金なら、堂々と払える。理事長などは、学生を選択する特権を生かし、寄付が確約された受験生の点数に「色」をつけるだけのことだ。それは私利私欲のためでなく、大学運営のためとするならば、大義名分になるから、やましきなど感じなかったのだろう。しかし、個人に直接お金が入らなくても、大学が儲ければ、その幹部である自分たちの報酬も高くなるのだ。

学生側とすれば、授業料とは別に、ほとんど義務のような形で、寄付金を大学に支払わなくてはならないわけだ。親たちが知らないところで、寄付しているのかもしれない。そんな学生が勉強をサボったり、医師として半人前で卒業したら、罰が当たるだろう。

東京医大では、多額の寄付金を約束した受験生だけでなく、現役学生や男子学生に有利にするように試験の点数に加点していたことも明らかになった。それも、

なかなか興味深い。つまり、三浪・四浪などは優秀でない、学生として扱われている。優秀でない学生は卒業せずに退学する率が高いから、というのが加点しなかった理由という。女子学生を、将来、医師としての働きが悪い、と決め付けている。出産・育児のときに職を離れることを理由の一つにしているのだろう。

そんな理由では、加点されない受験生たちが怒るのも当然だ。正当とはいえないけれど、一理あるのかもしれないと私は思ったりして……。入学に関してそんな要素を加味するのも大学側の裁量範囲かもしれないが、試験の点数を加減するやり方は、もう世間的にまじいだろう。

受験生が試験の点数で合格しても、面接で落とされるのは、やりきれないものだ。「どうしてだろう？」という疑問が渦巻くことになる。

② 親切的詐欺グループ

【毎日新聞朝刊 2019/3/19 女の気持ち「だまされた」

匿名 88歳

土曜の昼ごろ「〇〇警察です」と電話があった。何事かと慌てる私に「話のわかる人に代わってください

い」。1人暮らしなのだとすると、「詐欺犯が持っていた300枚のキャッシュカードの中にあなただのカードもある。署内はこった返して人手が足りないの、金融庁の井上から連絡させる。詳しく話してください」と言われた。

井上と1時間話した。「責任を持ってあなたの口座に戻します」などと言い、こちらの話も親身になって聞いてくれた。直後に、「使えなくなったカードを裁判所を持っていく」と取りに来た代理人にカードを渡した。

週末に帰宅した次男にそのことを話すと、「だめだ警察に行こう」。通帳を確認すると、私の全財産だった100万円が消えていた。】

最初の男は、警察官らしい硬い語り口で話しかけてきたものだろう。やや高圧的に、ぞんざいに……。次の金融庁の井上は、丁寧で、非常に優しくたとみえる。この差が巧妙なところだ。被害者の女性は、この男と1時間も話しこんでいる。井上の話のうまさが光る。しかし、電話の先では、どんな風体をした男なのか、わかったものではない。話し方なら、どんな職業にも、どんな性格にも演じわけることができるのだ。

カードを取りに行く人だけは、公務員風の身なりをきめこんで、それなりの演技をしなければならぬ。マスクをしたいところだが、怪しまれるから、素顔で勝負する。

この場合、グループ組織になっている。複数の人がそれぞれ自作自演をしている。一人は脅し役、もう一人は救済役を演じている。特殊詐欺の手の一つの典型例だろう。彼らは、警察官や公官庁の職員を騙る（かた）ことが多くなっている。

「話のわかる人に代わってください」というのは、実は、一人暮らしかどうかを確かめるためだ。彼らは、電話の声が女性なら、家には他に旦那や息子がいるかもしれない、と考える。この女性は自分で一人暮らしだと言ったから、詐欺師はほくそ笑んだことだろう。一番だましやすいため。

それにしても、いきなり「話のわかる人に代わってください」とは無礼だ。女性のあなたを「話のわからない人だ」と最初から決め付けている。けれど、警察官はそんなものだと思います。怒る気がしない。もしも「詐欺かもしれない」と直感したから、「おたくこそ、話のわかる上司に代わってください」と言ってやりた

そして、彼は「詐欺犯があなたのカードを持っている」とあなたを脅す。あなたは不安でいっぱいになる。それなら、その銀行に預けたお金は、もうすでに引き出された公算が高い。「犯人グループがカードを偽造して、私の口座から預金をぜんぶ引き出したに違いない」と思い込む。目の前が暗くなる……。〈複数のカードを持っているなら、どのカードが偽造されたのだろうか、と疑問を持ちたい〉

でも、金融庁の井上が親切にも「責任を持ってあなたの口座に戻します」と、手を差し伸べてくれる。金融庁は、銀行に睨み（にら）みを利かせている省庁だから、詐欺被害を救済できる、などと言うのだろう。（うそばっか）

あなたは、救い神のような存在の井上に任せるしかない。直後に代理人が家に来たのは早すぎる対応であり、怪しいところだが、あなたは、もう役に立たないようなカードなら、捜査協力のために、それを代理人に渡してしまう。「パスワードを確認しますので、教えてください」などと言われ、それを告げてしまう。

「電話番号と同じよ」

立ち去った代理人は、その足で、近くの銀行端末のある店に寄り、全額を引き出す。

「たった百万円か、しけてるなあ」

③ 強制性交とは認められない

【毎日新聞朝刊 2017/1/21 社会】

「強姦罪」の名が消滅。性差解消のため「強制性交等罪」に変更へ】

【毎日新聞朝刊 2019/3/11 なるほドリ】

せん妄……手術などで脳に機能障害、入院患者の2〜3割に症状が出る。手術直後にわいせつ行為をしたとして起訴された医師に無罪判決。「せん妄だった可能性がある」という判断だった。】

【毎日新聞朝刊 2019/3/31 社会】

深い酩酊状態で抵抗できない女性が被害の準強姦事件、なぜ無罪に？

判決理由「明確な拒絶なく、男性が誤信する状態」】

【毎日新聞朝刊 2019/4/5 社会】

名古屋地裁判決、19歳の娘に準強制性交等罪に問われた父親に無罪。抵抗不能状態だったかどうかについて、裁判官「暴力を恐れ拒めなかったとは認められない」】

強制性交事件でいくつかの無罪判決が出たことに對

して、メディアの記者たちが疑問を投げかけている。私もそうだ。

「拒絶しないから、合意しているんだろう」と思い込んで性交する分には、強制性交の罪に問われないといっている。もしも、和合だったら、警察に届けたり、裁判に持ち込んだりしないものだろう。意に反する性交だったから、原告が被害を訴えているのだ。

これらのケースでは、そもそも、性交しようとする者が「拒絶しないから、相手が合意しているんだろう」という思い違いをしているわけで、そこに大きな誤りがある。自分に都合のいいように解釈することが、過ちだろう。正当な言い訳にもならない。

性交される側は怒り心頭だろう。合意なく、無防備な状態で、ただで、やられてしまっただけは、「暴行された」という心境になる。

3 / 11の記事では、せん妄の可能性があるからといって、小さい可能性でしかなく、それを根拠に無罪にしてしまうことには疑問が残る。手術が脳に影響することがあり、麻酔の作用もあって、患者は夢うつつの状態だったとみなされたわけだ。しかし、その患者にはかなり鮮明な記憶が残っており、下半身にも感覚が残ったと思われる。いくらなんでも、夢か現実か、

判断できることだろう。あいまいな記憶だったら、騒ぎ立てしないものだろう。

3 / 31の記事では、女性が酒を飲まされ、泥酔した状態だったと思われる。拒絶しようにも、酔いのためにできなかった、と解すべきだ。加害者が、拒絶できないようにするためという魂胆で酒や薬を飲ませたと考えるところだ。悪たくみと悪行がダブルになっているから、罪は軽くないはずだ。

4 / 5の記事では、そもそも父が娘を手籠めにすることは人道に反する行為だ。とんでもない罰当たり的な行為を容認してしまう裁判官は、そうとうなボンクラだろう。娘は、無抵抗だったにしても、父からの強い圧力を受けて拒絶できなかったと解すべきだろう。それまでに虐待の事実もあつたわけだろう。裁判官はその事実を認めながらも、拒絶しなかったことを「合意」と判断した。被告に都合のいいように解釈している。徹底抗戦しなかった原告側に非があるとでもいうのだろうか。

こんな強制性交のケースは、だいたい薄暗い、密室のようなどころで行われるから、明確な証拠に乏しいものだろう。逮捕して尋問しても、加害者がその罪状をすんなり認めることもほとんどないだろう。告訴す

ると、逆に名誉毀損だと開き直る者もいるのだ。

それにしても、「疑わしいだけでは罰しない」という建前で、被告たちをすべて無罪にしてしまつては、弱者は常に泣き寝入りだろう。

有罪にする自信のないケースはだいたい不起訴にしてしまう、あの検察が起訴するぐらいのケースだったから、いくつかの状況証拠があつたわけだろう。それなりの確証や、客観性、合理性を持つていたと思われる。これでは、検察は「強制性交等罪」での起訴を躊躇することになる。起訴したとしても、裁判で主張が認められそうもないなら、不起訴にして釈放せざるを得なくなる。すると、被害者は救われぬし、類似例が頻発して被害者が増えるにちがいない。

④ ドクターストップのかかった三浦雄一郎

【毎日新聞夕刊2019/1/7 憂楽帳】

三浦雄一郎さん（86）がアコンカグア登頂を断念した。4200メートルのベースキャンプからヘリコプターで5580メートル付近に移動し、歩いて6000メートルのキャンプ地に到着、天候が悪く2日間回復を待ったが、医師がストップをか

けた。」

【Wikipedia「三浦雄一郎」より

2013年5月23日、エベレストに最高齢80歳で登頂した。下山中に体調を崩し、標高6500メートルのキャンプから標高5300メートルのベースキャンプまでヘリコプターを使って下山した。】

彼がこれまでやってきたことは、マスメディアを意識したパフォーマンス的なことばかりだ。受けを狙ったの、ほとんど売名行為をしてきた。今度も「最高齢の登頂」というタイトル狙いのパフォーマンスだろう。高所からスキーで滑降することも彼一流のパフォーマンスだ。

挑戦的な姿勢はよいけれど、彼の場合、それは一種の興業であって、純粹な冒険とは言えない行為になっている。「そこに山があるから……」というような理念や信仰のようなものなど、彼には見受けられない。彼の場合、一番高い山に登ることが、人々の注目を集めるための手段になっており、高いところが名声とお金を得るための舞台になっている。体力勝負の、うらやましい道楽をしている。でも、失敗すれば、人から何

を言われるかわからない。どんなに準備万端のことであっても、無謀だったと言われてしまうことだろう。

アコンカグアといえば、南米アンデス山脈の最高峰（標高6960メートル）の山だ。ほとんど地球の裏側にあるから、日本から遠征するだけでも、大変だ。多くの隊員・付添者たちを引き連れ、医師まで同行させる登山とは、まるで大名行列だった。金がかかっていそうだが、便乗的な企業のスポンサーがしっかりとっていたのだろう。

今回の失敗は、「年寄りの冷や水」そのものだ。「医師に言われて登頂断念」とは、ある意味で、情けないことだ。「人に言われるまでもでなく、自分の体調ぐらい自分で判断しろよ」と、私は言いたくなる。

結局、彼には高山に登るだけの体力がなかったことになる。スポンサーなど資金の面や、協力者に関して、怠りなかったようだが、肝心の自分の体力づくりに関して、怠りがあったのだろう。

高度を上げるためにヘリコプターを使うことは、ずるい。それはほとんど反則行為だ。他の遠征隊員たちは歩いて上ったのに、彼だけ特別扱いだ。そうまでして登りたいか、と問いたくなる。フェアな条件で競うスポーツの理念を忘れてるんだらう。たとえそれで

登頂したとしても、自力で上ったことにならないだろう。少なくとも私は「登頂した」とは認めない。それは「ヘリコプターを使つての登頂成功」というべきで、自分の足で登つたことにならない。今回の場合、「ヘリコプターを使つても登頂に失敗した」のだから、情けない。

2013年にエベレスト(8844メートル)に登頂したけれど、自力で登つたとは言いがたい状況だった。その映像の一部を見た私の記憶では、特別に軽装の彼が随伴者に脇を抱えられるようにして(8000メートル地点から滑る降りるために必要なスキー板を彼自身は持つていなかった。他の人に持たせていたのだろう)、あるいはロープで引張られるようにして、ゆっくりと上つていた。重い足取りだった。一般の登山隊の一員としての参加だったら、彼は完全においていかれた。ペースだった。

それでも登頂したのは良いとして、下山にヘリコプターを使つたことは問題だろう。それは非常手段であるべきだ。安易に使つたわけではないならば、それは遭難に等しい事態だったことになる。安易にヘリコプターを使つたか、あるいは必要に迫られて使つたかはつきりしないが、いずれにせよ、ともに下山でき

ていなかった山行は、とても成功とはいえない。そこで彼は、エベレストはもう無理だと悟つたのかもしれない。では、南米大陸の一番高い山で……と考へたのだろうか。ともかく、二番目に高い山ではダメなのだ。

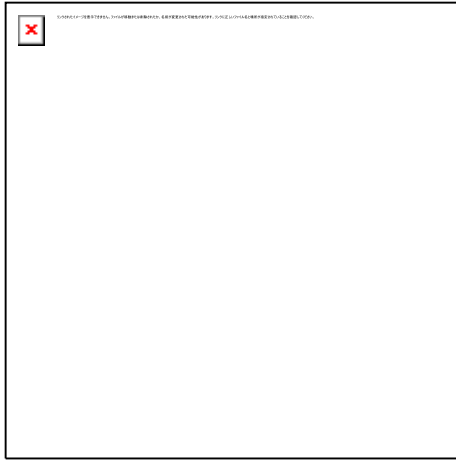
今度も、ヘリコプターを使つて大きく高度を稼ぎ、背中を押されるようにして6000メートルのキャンプ地に行つたけれど、たつた二日間の天候待ちを理由にしてあきらめている。天候待ちでなく、実際は体力回復待ちであつたわけだろう。単に天候待ちなら、天候が回復するまで待てばいいことだ。不整脈のせいにもしているが、それは持病の一つとして前からわかつていたことだろう。一番大きな要因として、体力の衰えがあつたから、医師がストップかけたのだろう。
〈オレはギブアップしていかない。医者が言うから、しかたなく止めたんだ〉と強がり、は言える。

⑤ 大坂なおみの肌の色

【毎日新聞夕刊2019/1/7 憂楽帳】

日清食品のPRアニメで大坂なおみ選手の肌を「白く表現している」と米で指摘された。】

その資料画像を見たところ、白い肌として表現しているわけではなく、いわゆる網掛けして、やや灰色をつけている。やや灰色ではダメなのだ。それでも、アニメ画像の大坂なおみが白く見えるようだ。つまり、その画像を見て、世界には「白すぎる！」と文句をつける人がいるのだ。それを人種問題にからめる。人種的偏見とする。彼女は黒人系とみなされていることか。



日清食品PRアニメの中の
大坂なおみ画像

人種はともあれ地肌は黒い。

「違うだろう！ 彼女の顔はもつと黒いぞ」
「本来は黒いの、わざと白っぽくしたんだろ！ クロを差別し

ているんだろ」などという批判がわき起ったのだろう。本来の黒い肌を白くすることをホワイト・ウォッシュというって憤慨する人がいる。

肌の色付けだけでなく、アニメの人物がスマートすぎて、少々ふつくらした大坂なおみに似ていないところが問題だったかもしれない。黒人としての特徴がなく、どちらかと言うと、それは白人の少女っぽく見える。ただし、これまでの前例によれば、黒人っぽく目鼻立ちを強調すると、例えば唇を大きく描いたりすると、また強い文句が出るようになっていく。

ともあれ、大坂なおみを「白人」と表現したことに、彼らは大いに気に入らなかった。気に障ったようだ。大坂なおみを有色人種として区分しなければ、気がすまないわけだ。日清食品などは、その指摘の鋭さに恐れをなしてか、すぐにPRアニメを引っ込めた。人種問題にされてはたまらないと考えたのだろう。めんどうなことだ。そんな肌の色のこともめることに少々うんざり気味の私は、「肌が白くても黒くても、どうでもいいじゃないか」と叫びたい。

なお、大坂なおみの自宅は、アメリカのフロリダにあるというから、明るい空の下で肌が日に焼けたのかもしれない。

今冬のさつぽろ雪まつり（毎年2月に行われる）で大坂なおみの雪像が作られたとテレビ・ニュース報道があった。彼女は話題の人物の一人として取り上げられ、雪像にもなったわけだ。その雪像は、当然ながら、全身「真っ白」だった。これを見た外国人は、「顔を黒く塗れ！」と言い出すのだろうか。

⑥ コーチを首にした大坂なおみ

【毎日新聞朝刊 2019/1/25 社会】

大坂なおみ、実は完ぺき主義、大坂は喜怒哀楽が率直に表に出る。いらいらするとラケットを投げ捨てることもあった。感情の高ぶりはプレーに一切妥協しない向上心の表れでもある。】

【毎日新聞朝刊 2019/1/27 社会】

「チームなおみ」は国内外のコーチやトレーナーが結集したスペシャル集団。】

【毎日新聞朝刊 2019/2/13 スポーツ】

大坂、バイン氏と決別、コーチ契約解除。米紙ニューヨークタイムズ「最近で最も成功していたパートナーとの関係を突然終わらせた」】

【毎日新聞朝刊 2019/2/17 日曜くまびら】

大坂なおみ選手の国籍問題、二重国籍。22歳の誕生日までにどちらかの国籍を選択しなければならぬ。】

【毎日新聞朝刊 2019/2/20 総合】

テニス・ドバイ選手権で、大坂なおみが初戦敗退した。強引なショットが目立った。試合後の記者会見ではコーチ関連の質問が相次ぎ、思わず悔し涙があふれ出た。】

【毎日新聞朝刊 2019/3/1 スポーツ】

大坂の新コーチが決定した。米国テニス協会女子強化コーチのジャーメン・ジェンキンス氏（34）に。

大坂は、躍進を支えてきたサーシャ・バイン氏（34）との契約解消してから、後任のコーチが注目されていた。】

【毎日新聞夕刊 2019/3/8 総合】

大坂なおみ「(新コーチは)とてもいい人だし、打ち合いもやりやすい」と話した。】

大坂が優秀なコーチを首にしたのは、「久々の快拳」だろう。まさに（自分が気に入らなければ、解雇する）というトランプ流のやり方でもある。「チームなおみ」には統括する人物がトップにいるのかもしれないが、

コーチを誰にするかについては、大坂の意向が最も尊重されたのだろう。

テニス界では、選手がコーチを首にできることが、なかなかおもしろい。でも、一般の日本人の感覚で言えば、ここで解雇したのは「恩知らず」ということになるかもしれない。オーストラリア・オーブンで優勝してまもなく、解任をブログで公表したのだから、誰でも、「あれ？」と思う。「コーチと選手の組グとして、この二人は一番うまく行っていたのに……」 これからも二人三脚でやっていけば、何度も優勝できる（大いに稼げる）チャンスをつぶしてしまったことかもしれないのだ。

雇われコーチはつらい。指導者の立場でありながら、選手のご機嫌を伺わなければならないところがある。サーシャ・バイン氏は、ブログの対応でも、未練がましいことは何も言わず、さばさばした言葉を返していた。生徒を指導する教師役に徹し、練習や試合での確かなアドバイスをして、世界ランク一意の選手に押し上げたのだから、名声が高まった。大坂のコーチを首になっても、今後、引く手あまただろうし、大坂が稼いだ賞金の中から、彼の取り分として妥当な金額をもらえさえすればいい。彼が満足する金額で合意したのか

どうかは、あやしい。

一般に、監督・コーチは強い権力を持っているから、監督・コーチに異を唱えたりすれば、試合に出されないなど、いじめを受けるものだ。特に団体競技の世界では、監督・コーチが絶対的な権力を持つ。その意向（裁量）で、にらまれた選手は、いくら有能でも、試合に出られなくなるし、練習もおぼつかない。コーチの言うことを無視したり、逆らったりすれば、平手で張り倒されても仕方がないとされる。近年、監督・コーチの横暴ぶりが問題になった。マスメディアに多く取り上げられた。体操、レスリング、柔道、水球、スピードスケート、ボクシング、アメリカンフットボール、サッカー……。選手の身分は低いし、弱い立場にいると私は思っていたが、テニスでは違った。

大坂は、今回の「有能なコーチ」を首にした理由について、多くを語ろうとしなかった。彼女は「金には関係ない」、「彼とではハピーではなかった」などと言っていただけで、詳細を語ろうとしない。そんな否定文では、答えになっていない。理由を答えたことにならない。

メディアのレポーターたち、あるいは多くのファンは、「では何だ？」という疑問を持つから、しつこく

聞くことになる。その追求の厳しさに、大坂は涙ぐんだ。要するに、人々を前にして語りたくない理由があったとみえる。

私が想像するに、コーチの言葉がうるさく聞こえるようになったことが、その一因だろう。コーチは指導者として、あれこれ指図する。それに対し、

「私はあなたの言うとおりにはできない。あなたがとやかく言っても、私をイラつかせるだけ！」

彼女は自分がミスをして、ポイントをとられると、ラケットを放り投げる動作をしげしげ見せていた。

(だいたい、テニスでは自分のミスが相手のポイントになるから、ミスが多発すると、うんざりしがちだ) イライラしやすい性格の大坂は、コーチの言葉でますますイライラを募らせた、と私はみる。

「うるさいわね! あんたは首よ、明日から来なくていいわよ!」——などと叫んだかもしれない。

つまり、コーチを首にした理由としては、感情的に(嫌いになったから)と私は考える。ある意味で、わがままから来たことだろう。先頭記事にあるように、プレーに一切妥協しない向上心の表れとは、ほめすぎだろう。感情をコントロールするのも、技のうちだろう。コントロールできなければ、プレーにもその波が

出てしまう。

彼女は好き嫌いの感情でコーチを選んでいる。今度のコーチは「いい人だ」という。それを裏返せば、「前のコーチは嫌な奴だった」ことになるが、さすがにそれは口に出さない。

でも、コーチは、煙たいぐらいの厳しい存在であるべきだろう。叱咤激励する役割を持つ。仲良く楽しく練習しては、それ以上伸びないと思うのだ。楽しい練習では、どうしても怠惰になってしまう。そんな生ぬるいコーチを選んだとすれば、失敗になるだろう。ビジネスライクに、あるいは理性的に「このコーチと組めば、テニスに勝てる。口うるさい人だけど、励まされる。ついてゆけば、もっと高みに上れるだろう」などと割り切って考えることが必要だろう。

コーチを首にしてからまもなく、まだ新任のコーチが決まらない中での試合で、大坂は完敗した。大坂には「それ、みたことか」という周囲の声が聞こえていたはずだ。コーチに関する質問は、「優秀なコーチがついていないと、オマエはだめなんだ」というような、厳しい批判をぶつける意味だったから、大坂は敗戦後の記者会見で、たまらず泣き出している。鋭い批判に対して、鋭い言葉で打ち返す、あるいは適当にあしら

う技量は、まだ彼女は身につけていないようだ。

彼女の場合、子どもの反抗期に似ている、と私は推察する。彼女の場合、5歳ごろから、否が応にも、親たちにテニス・ラケットを持たされ、毎日ほとんどテニス付け生活を送ってきたという。

複数回優勝し、世界ランク一位になったから、自信もついた。幼かった少女が世界屈指のプロテニスプレイヤーになった。(もう他人からとやかく言われたくない、私は私の道を行きたい)というコーチ離れの感情が沸き起こった、と私はみる。

⑦娘をいたぶり続けた父親

【毎日新聞朝刊 2019/1/26 社会】

千葉県野田市での女兒死亡事件で、父・栗原勇一郎(41)を傷害容疑で逮捕した。容疑者は自宅で長女(10)の髪の毛を引っ張り、冷水のシャワーをかけ、首付近を両手でわしづかみするなどしてけがをさせたとしている。1月24日に死亡した長女の体には複数の古いあざがあった。父の栗原勇一郎容疑者は、当日午後11時10分ごろ「娘ともみあいになった後、(娘の)意識がなくなった」と供

述した。】

【毎日新聞夕刊 2019/2/1 社会】

千葉女兒死亡、父逮捕1週間。2017年7月上旬、親族が、容疑者から母親なぎさ(31)へのDVと心愛さんへの恫喝について市(沖縄・糸満市)に相談した。転居先の野田市に「どう喝」は虐待が確認できなかったことから伝えていなかった(注、どう喝は虐待のうちに入らない、とみなされている)。

心愛さんは転校先の小学校でいじめに関するアンケートに、「お父さんにぼう力を受けています。夜中に起こされたり、起きているときにけられたりたたかれたりされています。先生、どうにかできませんか」と書いた。】

【毎日新聞朝刊 2019/2/5 社会】

千葉女兒死亡、1月24日午後11時10分ごろ110番通報があり、救急隊員らが発見したときすでに死後硬直が見られた。母親は制止せず黙認していた。母親を傷害の共謀をした容疑で逮捕した。彼女は夫の勇一郎からDVを受けていた。勇一郎とは離婚したものの、次の子が生まれ再婚した。なぎさ容疑者について、識者「強い支配下にあった」市の関係者「夫と一緒にいるとほとんどしゃべらず

主導権を握られていた」】

【毎日新聞朝刊 2019/2/6 社会

千葉女児死亡、逮捕の母は「夫の指示で、外出させなかった」「娘に十分な食事を与えなかった」と証言した。

勇一郎は、1月7日に学校に「娘は冬休みに妻の実家の沖繩に滞在しており、休ませる」、1月11日には「祖母の体調が悪いので1月いっぱい沖繩にいる」と連絡していた。】

【毎日新聞朝刊 2019/2/7 社会

千葉女児死亡、事件当日に長時間立たせられ、疲れてふらついたり倒れこんだりした心愛さんを父が再び立たせていた。なぎさ容疑者「(勇一郎が)過去にも何度も立たせることがあった。やめてと言ったが、聞いてもらえなかった」

心愛さんの体には以前のあざが複数あった。】

【毎日新聞朝刊 2019/2/8 社会

千葉女児虐待、なぎさ容疑者「冬休み中に(心愛さんが)夫に暴行されて体の見える部分にあざができたため、虐待がばれないように1カ月間外に出さないようにしていた」】

【毎日新聞朝刊 2019/2/9 社会

千葉女児虐待、肺に水がたまっていた。1月24日午後11時20分ごろ駆け付けた救急隊員が浴室の洗い場でおむけになって倒れている心愛さんを発見したとき、身につけていた服がぬれていた。勇一郎被告「シャワーを浴びせたら動かなくなつた」と話したという。鼻や口から水を強引に飲ませた可能性もあると見て、調べている。】

【毎日新聞朝刊 2019/2/10 社会

千葉県野田市女児虐待の動画が複数あった。スマホで撮影か、千葉県警が押収。勇一郎が自宅で心愛さんに暴力を加えたり立たせたりしている様子が映っていた。

勇一郎「午前10時ごろからしつけのため、立たせたり怒鳴ったりしていた。シャワーをかけたら動かなくなった」】

【毎日新聞朝刊 2019/2/11 社会

千葉女児死亡、2017年に心愛さんを一時保護した際、医師が心的外傷後ストレス障害(P.T.S.D)の疑いがあると診断していた。児相職員が勇一郎について質問した際に泣き出したという。

アンケートを実施したことを学校が父に伝達。勇一郎はアンケート回答のコピーを要求。「家族を引

き離された気持ちかわからないか！」などと職員に迫ったという。市教委は18年1月、容疑者の威圧的な態度に屈し、アンケートのコピーを渡した。」

【毎日新聞朝刊 2019/2/15 社会

千葉女児死亡、県警は、暴行は年末年始に数日にわたって継続的に行われたと特定した。骨折や顔にあった複数のあざや傷は1月24日以前の暴行によるものと判明。骨折後、受診させなかった。自宅で心愛さんの両腕をつかんで引きずったり、顔を浴室の床に打ち付けたりした上、横になっている心愛さんの体の上に膝を押し付けて乗りかかり、顔面打撲と胸骨骨折のけがをさせたとしている。

勇一郎は、沖縄県に10年間ほど暮らし、なぎさ容疑者(32)と結婚、一度は離婚したものの、2017年に次女(1)が誕生する前に再婚した。17年8月に一家で(出身地の)野田市に転居し、18年4月沖縄の観光振興団体の東京事務所に採用された。」

【毎日新聞夕刊 2019/2/25 社会

千葉女児死亡、昨年12月30日〜1月3日、自宅で心愛さんの体の上に膝を押し付けて乗りかか

るなどして顔面打撲と胸の骨を折るけがをさせた疑いがある。

通っていたそろばん塾の講師「一心不乱にやっていると、とにかくまじめでかわいくて……」

転居した先の同級生の母「内気な娘に『外に行こうよ』と声をかけてくれた」、一方で、その娘は、登校してきた心愛さんの顔に傷がついていたことがあったとも話したという。」

【毎日新聞朝刊 2019/3/7 社会

千葉女児虐待、千葉地検は3月6日、父・栗原勇一郎容疑者を傷害致死罪で、母なぎさ容疑者(32)を障害ほう助罪で起訴した。起訴状によると、1月22日午後10時ごろから心愛さんを暴行し始めた。長時間立たせたり、肌着のみで暖房のない浴室に放置したりして十分な睡眠を取らせなかった。24日、午後1時ごろ浴室で、「5秒以内に服を脱げ、5、4、3、2、1」などと言って(裸にさせてから)冷水を数回浴びせ、「シャワーで流せよ、お湯じゃないだろう」などと言った。4時ごろリビングの床にうつぶせにし(心愛さんの)背中に座り、両足をつかんで体をそらせた(注、これはプロレス技の『逆エビ固め』だろう)。9時50分に

寝室に入ろうとした心愛さんに「何でいるの、だめだよ、ちよつと待て」といつて浴室に連れ込み、顔に冷水シャワーを浴びせた。」

【週刊文春 2019.2.14号「心愛ちゃん鬼父の本性を暴く」

捜査関係者「あざは見えない部分に集中していた」心愛ちゃんは親しい友人に「お母さんがいないとずっとパーで殴られる」と言っていた。

近隣住民「事件の二日前から、男性の『殺してやる！死ね！死ね！』という声と、女の子の『ギャー』と泣き叫ぶ声が聞こえていました」

なぎさの同級生「旦那さんは結婚前は優しくかったのに、結婚すると豹変したそうです。暴力がひどくて、それが原因で（何も話せないほどのうつ状態で）なぎさは精神科に通院するようになった。束縛が激しく、友達と会おうとしても携帯電話やメールを常にチェックされ、外出も制限されていた。冷水シャワーもやられたと聞いています」

結婚生活一年でなぎさは娘を連れ、実家に戻った。その後離婚が成立したが、勇一郎はなぎさの実家を執拗に訪れ、復縁を迫った。（ほとんどストーリーカーだったが、親族に拒否されていた）

心愛ちゃんが小学二年になったとき、なぎさ母子はアパート暮らしを始めたが、ほどなくして勇一郎が出入りするようになった……。

勇一郎は警察の取り調べに対して「しつげであつて暴力ではない。悪いことをしたとは思っていない」

【週刊文春 2019.2.21号「心愛ちゃん虐待、鬼父の暗黒面」

百七十五センチほどの勇一郎が華奢な心愛ちゃんを蹴り飛ばし、素手で殴りつける。

去年四月から勤務した沖繩観光をPRする会社の関係者「仕事熱心で常に笑顔を絶やさず、コミュニケーション能力が高い。沖繩情報を伝えるラジオ番組に社を代表して出演してもらった。よどみなく人気のツアーを紹介していた」

勇一郎は八歳のとき、野田市の現在の実家に引っ越してきた。埼玉の私立高校を出た。大学を卒業した後は、JALの子会社社に就職するも、数年で退社する。その後、東京にあるガス機器などを販売する会社の営業職につくが、ある日突然、「仕事の内容が自分に合わないの、とりあえず辞めたい」と言い出し、三年で辞めた。

29歳のとき、なぎさと知り合い、結婚。沖縄に引越し、08年に心愛ちゃんが生まれたが、勇一郎は定職に着かず、なぎさが独身時代にこつこつと貯めた百五十万円ほどの貯金を食いつぶしていた。

なぎさの同級生「旦那さんは結婚直後に豹変し、なぎさを束縛して暴力を振るうようになった。『オマエは無能だ。何もできないバカだ』とののしった。なぎさは二十四時間びくびくし、理不尽な理由で怒られていた。見かねた友人が、旦那の元から彼女を救出し、糸満市の実家に連れ戻したと聞いている。その後離婚したとばかり思っていた」

野田市の小学校へ転校してから二カ月たった十一月、心愛ちゃんはアンケートに父の暴力のことを書いた。担任が聞き取ったメモ書き「あたま↓なぐられる 10かい(こぶし)、くちをふさいで ゆかにおしつける↓自分の体だいじょうぶかな」

小学校からの通報で柏児童相談所がすぐに心愛ちゃんを保護したが、「親族宅なら大丈夫」と判断し、年末に勇一郎の父母、妹とその子どもが住む実家で生活するようになる。

兇相の担当者がその実家を訪れたときのこと、事前にアポを入れていたにもかかわらず、勇一郎の父親

が「何をしに来たのか？ 一時保護に納得が行かない。心愛が悪い友達にそそのかされてアンケートを書いたのではないか」と担当者に詰め寄った。

その後勇一郎は、心愛ちゃんを書いたという文書を職員に見せた。「アンケートの内容はうそです」というものだった。さらに勇一郎は職員の名前を名札で確認し、「これ以上、家庭を引っ掻き回すようなことをすると、組織としてでなく、職員個人として訴える。名誉毀損も検討する」と言い放った。

兇相側は、文書は勇一郎に書かされている可能性が高いと認識していたが、圧力に屈して帰宅を認めた。そして悲劇が起きてしまった。

精神科医の岩波明氏「(中略) 妻や子供を自分の付属品、一部だと思いい、何をしても許されると考え、言うことを聞かないことが許せない。そういう理由で精神的、物理的に支配下においているんです。最初はただ本当に叱っていたのかもかもしれませんが、ある時点から自分の子供を泣かすことが面白いんだと気付いてしまったのでしよう。暴力自体が彼の快樂や生きがいになっていたのでないか。そういう人は、あとから見て楽しむために、動画など犯罪の記録を保存することがあります」

・暴力支配

多くの記事は断片的ではあるけれど、それらの行間に、栗原勇一郎（41）のウソとハッタリがよく表れている。「自分さえ楽しければよい」という身勝手なことばかりだ。時には脅迫・恫喝して、他人を意のままにしようとする。この男の虐待は、今に始まったことではなく、沖繩に住んでいたころから、近隣・親族、学校などで知られていたが、野田市に転居してからも、心愛さん（10）は十分に保護されることなく、命を落とす結果になった。

栗原勇一郎は、おんなこども女子供をいたぶるのを趣味としていたにちがいない。女子供がギャーギャー泣きわめくと余計に興奮してくるタイプの男だ、と私はみなす。女子供を見下し、幼い女の子をしつけと称して暴行・暴言を繰り返していた。彼の場合、しつけを楽しんでやっていると一癖の特徴がある。自分の意のままに子どもを従わせることが楽しい。腕力にものを用い、暴力で女子供を支配したがる男なのだ。

その前は、妻に対して暴力を振るっていた。いわゆるドメスティックバイオレンス（DV）の典型例だったのだろう。口論でかなわないとみるや、ほえまくり、

手や足を出す。（ほとんどアフリカのヒヒ類と同じ行動）

妻への暴力が、いくぶん成長した心愛さんに代わっていた。その方がおもしろかったわけだろう。子どもをしつけることが楽しくてしかたがない。子どもが自分の思い通りに成長していく楽しみもある。周囲がそれは虐待だと指摘することは彼にはわかっていた。しかし、彼にとつてあくまでもしつけであって、指導的立場の親が行うべき正当な行為だった。しつけという言葉が虐待を正当化するための方便になっている。しつけと暴行がイコールの関係にある。心愛さんに冷水を浴びせるときに「5秒以内に服を脱げ、5、4、3、2、1」と言ったあたりは、楽しんでやっている様子がよく表れている。

勇一郎が心愛さんを暴行する場面を自分のスマホで動画撮影していたという証拠も上がっている。女兒を暴行する趣味の男のやり方らしい。勇一郎が心愛さんを長時間たたせていることにも注目したい。それは「陰湿な暴行」になる。

世の中には時々そんな趣味（悪趣味）を持つ男がいることを見聞きする。酒を飲むと本性を現して、家族の者を殴る・ける・怒鳴りまくる父親は、かつての日本では、ありふれた存在だった。茶の間でお膳をひつ

くり返すのも、彼らの常套手段だった。（昨今では、お膳がないからひっくり返せない）

栗原勇一郎もその例に漏れない。彼は家に戻ると、威張りまくる。酒を飲むと暴れる父の例は昔から知られていているが、この男はしらふで暴行する。熱心なことに、時間を選ばず、夜の10時過ぎ（もう深夜とされる時間帯だ）にも娘をたびたび起こして、しっつけしていた。

娘の行儀作法にうるさかったのだろう。些細なことにも大声を上げ、少しでも抵抗するなら、ぶちのめす外から見えるところにあざがついては、周囲がうるさいから、服で隠れる部分をたたく。鬼のような顔で怒鳴っている彼の心のうちでは、これがなんとも楽しい。楽しいから、やめられない。子どもをしっつけているときに、生きている喜びが感じられる極上の時間帯だった。

「この楽しい時間を、やつらに邪魔されてたまるか！」と彼は思っていることだろう。

やつらとは、もちろん、学校関係者や児童福祉・保護の職員たちのことだ。女兒を保護されたとき、教育委員会や児童相談所の担当者が、心愛さんが学校で「父のこと」を書いたアンケートの存在をほのめかすと、

彼らを怒鳴りつけるように、「心愛が書いたアンケートを見せろ！心愛がオレのことを書いたんだろ、わかってるんだ」と強要・脅迫した。その勢いに屈し、その写しを渡してしまった。（守秘義務を破った）

その後、心愛さんは、「父のこと」については一切書かず、訴えもしなかったという。勇一郎にはげしく恫喝されたと推察される。「コノヤロー、一度と告げ口したり言いふらしたりしたら、ただではすまさんぞ！」

心愛さんが児童保護施設に収容されたとき、施設から出すために、「心愛もたたかれたというのほうそだったと言ってるだろ？すぐを家に帰せ！不当に子を親から離したことで、訴えるぞ！」「ドン」（机を叩く音）

・人物像

彼は大学を出たから、高学歴であり、それなりの能力を備えた人物だろう。父親のコネがあったにしても、卒業後にJAL（日本航空）の子会社に入れたのは、それなりの学識と資質があったからだろう。会社では、そつなく仕事をこなしていたようにみえる。しかし、長続きしていない。数年で辞めてしまい、その後も何回か職を変えている。辞める理由が、はっきりしない。人間関係のトラブルなども聞こえてこない。おそらく

「仕事がつまらなくなった」ぐらいことだ。ほとんど「氣まぐれ」によるものだし、利己的でもある。

この男が育った家庭環境で私が引つかかるのは、父親が暴力的なしつけを容認するようにみえることだ。その父親は、勇一郎が事件を起こす前には「暴力ではなく、しつけだ」と主張し、息子をかばっていた。兎相の職員も、その意外な対応ぶりに、たじたじになっていた。つまり「この親にしてこの子あり」のようなところがある。

妻のなぎさも、この事件に共謀した疑いで逮捕されたが、長年、勇一郎に殴られ、蹴られ、罵倒され続けていたので、自己主張もできず、黙って夫に付き従うだけの、たましいの抜け殻のような状態になっていたと推察されるから、私は同情したい。彼女は結婚後、精神科に通うようになっていた。

勇一郎が行うことに口出しできなかつたから、勇一郎と共謀したようにみえる。彼女には心の療養が必要なのかもしれない。

一度は離婚した。（妻の親族がなんとか離婚させたとみられるが、あの勇一郎がよく離婚に同意したものだ）その後雄一郎は、未練がましく、しつこく再婚を求め、ストーカー顔負けの、いやがらせ・脅迫・恫

喝を繰り返したのだろう。ただし、家族に対しては低姿勢だったという証言もある。

心愛さんが小学二年になったとき、なぎさが親族から離れ、アパート暮らしをはじめたことが、結果的によくなかった。執念深い勇一郎はすぐに転居先を突き止めたのだろう。鬼の形相をした勇一郎が母子の住むアパートにやってきた。

なぎさはせつかくDV男と別れられたのに、よりもどされ、ほとんど強姦と思われる手段で次子を妊娠したから、再婚に同意せざるを得なかつたのだろう。低体重で次女が生まれた後は、彼女自身も体調をこわして入院もした。すべて勇一郎が関係していたと推察される。なぎさ容疑者の逮捕は、事件後、憔悴しきつて自殺の恐れがあつたために警察で保護する意味があつたという。

・この家ではオレがリーダーだ

「テメーら、オレに従えよ！」と勇一郎は心の中で叫ぶ。女子供をぶちのめすことで、だれがリーダーなのかをわからせているわけだし、それによって自覚できる。リーダーには手を上げる権利があるかのごとく振舞う。現に、民法に親が子を指導することは親の権利（懲戒権）として設定されている。（ただし現在、見

直される方向にある)

「オレは一家の主だ。オレはテメーらより体も大きいし、腕力をもっている」と勇一郎は思う。確かに、あらゆる集団にはリーダーが必要だ。家庭という最小単位の集団においても、そうだ。

人間は、本能的に自分がリーダーとなろうとする志向性を持つ。リーダーとして振舞うことが本能的に楽しい。でも、単に強いリーダーシップではなく、正しさの上に立つ必要がある。

勇一郎としても、家庭でリーダーシップを発揮することが楽しかった。女子供をいたぶることで、リーダーとしての自覚が得られたし、実証にもなった。自分の強さを見せ付けることが誇らしかった。〈オレがこの家の長なんだ。一番のボスなんだ〉心の中でほくそ笑む。〈テメーらの上に立つのはこのオレだ！ テメーらはオレの部下のようなものだ、オレの言うことを聞いていれればいいんだ。ハハハ〉

女子供を殴りつけているときが、彼にとつて至高の瞬間だった。ひそかな楽しみとすべきものだった。〈会社でのいやなことなど、消し飛んでしまうよね。やめられねえ〉

生まれて間もない幼子を抱えた妻を殴っているので

は、大しておもしろくなかった。ほとんど無抵抗(無反応)では、張りあいがなかった。もつと生きのいい殴り甲斐のある小学生に目を向けた。

・しつけという名の暴行

子供をしつけることは、自分のささやかな楽しみの一つになっていた。そんな楽しみを学校や児童相談所、教育委員会の職員らに奪われたくなかった。あざが見つかるのと、とやかく言われるものだから、心愛さんには夏でも長袖の服を着せていた。

昨年(2018年)12月末からの正月休みの間に、勇一郎は心愛さんに、顔面打撲と胸の骨折を負わせたから、すさまじいものだったと推測される。それまで顔に出るようなあざをつけるのは避けていたはずの勇一郎だったが、このときは力いっぱい殴ったとみえる。おそらく、ささいな自己主張した心愛さんの顔を殴りつけ、倒れた心愛さんの体を膝で打ちつけて骨折させた。彼にとつてそんな自己主張は、反抗的態度そのものだった。顔にかなり大きいあざができたから、勇一郎は、1月の始業式から1カ月ほど、学校に行かせないことにした。外にも出さないように妻に厳命した。

そして約一カ月後の1月23日の夜から始まった暴行について、私は以下のように状況を推測する――

午後10時、勇一郎はいつものように、寝ている心愛を起こし、しつけようと思った。

「ミア、ちよっと来い！」

心愛さんは、また父に呼ばれたことに陰鬱になった。顔のあざは薄らいだが、一カ月たっても、まだ胸の骨折の痛みが残っており、体の動作もゆつくりになった。勇一郎は、その姿を見て、むかつとした。勇一郎には娘が骨折していることなど、知りもしない。

「そんな陰気な面をするな」バシッ 横っ面を張り飛ばした。

「そろそろ学校へ行かせようと思う。いつも言っていることだが、学校や他人に『お父さんに殴られた』と言ってはだめだぞ。そんな告げ口をしたら、ひどいことになるんだ、テメー、わかってるな！」

「……」

「返事はどうした？ コノヤロー」バシッ、ドシッ、バンバン

「ゆるして」

「それが返事か？ アホー、シネ」バシッ、ドシッ、ドン

「ウグツ、ウワーン、ウワーン……」

「簡単には許さんよ。オレを甘くみんなよ。オレは常

に厳しい男なんだ」ドシドシッ、バシン

「ウワーン、ウワーン……」

「ウルセー、テメーもオレをバカにしているんだろ」

ドシッ、バシン

「テメーは、オレがいいと言うまで、廊下で立ってろ！」

廊下は寒い。夜にはさらに冷え込む。心愛さんは薄い寝巻きのまま、凍えるような寒さにじっと耐えている。夕食を与えられなかったから、空腹だった。体中の痛みが治まらない。

2019年1月24日、朝になった。勇一郎は10時ごろに起きたすと、心愛さんを廊下に立たせていたことを思い出し、もう許すことにした。しかし、その場にはいなかった。心愛さんが子どもの部屋に戻り、うずくまるように寝ていたのを見つけ出した。そして無断で部屋に戻ったことになる。心愛さんは寒さに耐えきれなかった。

「言うことを聞かなかったなあ、コノヤロー」

ここで、大声を張り上げ、激高した顔を見せたが、本心では、笑っていた。しつけを継続できる口実が得られたから、むしろ都合がよかった。

髪の毛を抜けるほど強く引っ張り、首筋をわしづか

みして体を引き上げた。立たせると、バシン。おもいつきり頬をたたいた。

心愛さんは「お父さん、ごめんなさい」と必死に謝った。

「ごめんですすむなら、警察はイラン！」と、茶化したようなせりふをはいて、勇一郎はにやりと笑った。

「殴ったりけったりするとまた体にあざがついてしまだろう。そうだ、水攻めだ。水攻めなら、体に傷はつかんだろう」勇一郎は、海外では捕まえた過激派メンバーの口を割らせるために、水攻めするのが一番有効であることを伝え聞いていた。

心愛さんの髪の毛をつかんだまま、引きずるように風呂場に連れてゆくと、服を自分で脱がせた。「5秒以内に服を脱げ、5、4、3、2、1」

勇一郎は、そのパンツが濡れていたことに気づいた。いつのまにか漏らしていた。

「デマー、いつ漏らしたんだ？」

シャワーを準備した勇一郎を見て、心愛さんは、温かいお湯をかけてもらえると一瞬思った。しかし、シャワーのノズルからは、1月の冷え切った水が勢いよく流れ出た。「ギャー」と悲鳴を上げた。まるで熱湯を浴びせられたかのような痛さが、全身を走った。

「シャワーで流せよ、お湯じゃないだろう」

頭から顔に冷水シャワーを浴びせ続けると、心愛さんの鼻や口に強い水流が入った。「ウグッ、ウグ」口はふさげても、鼻はふさげない。

「刺激的だろ。どうだ、目が覚めたか」

そして、心愛さんの細い首筋をワシづかみにし、湯船に顔を突っ込んだ。湯船には生暖かい湯が半分ほど張っていた。

「ブクブク」心愛さんは口から空気を吐いた。

「グワツ」肺に水が入り、激しくむせた。顔を上げようとしたが、勇一郎に頭を強く押さえつけられていた。

「ウーン……」心愛さんの意識が遠のいた。

ぐったりした心愛さんの体を湯船からようやく引き上げると、勇一郎は放置することにした。〈そのうち意識が戻るだろ。今度は、あつたかいシャワーをかけてやるよ、熱いぐらいのやつをな、ウフフ〉

しかし、もう意識が戻ることはなかった。しばらくして娘の様子を見に来ると、裸の娘はあおむけに横たわったままだった。冷え切った体がまったく動かなかった。呼吸もしていなかった。

「ん？ 死んでいる！」勇一郎は、すぐに事の重大

さに気づいた。

「救急車を呼ぶか？」　しかし、体中アザだらけの娘を病院に運び入れることは勇一郎には不都合なことだったから、その考えを打ち消した。（もしも、ここですぐに救急車を呼んでいたら、隊員たちの手により蘇生させることができたかもしれないかった、と私は思う）

「どうしよう？　テメーが死んだら、オレの楽しみがなくなるじゃないか。いや、待てよ、次女がもう少し大きくなれば……」

「オレは殺すつもりじゃなかったんだ。逮捕され、刑務所にぶち込まれるかもしれないが、殺意がなかったなら、殺人罪は適用されないだろう」

勇一郎は自問自答したりして逡巡した。数時間経過し、死後硬直が始まってきた。しかたなく夜の10時過ぎに110番通報した。「オレの言分いぶんが、やつらに通じるだろうか……」

妻に向かって、「おい！　裸じゃ、まずい。なにか着せてやれ！」

無言でなきさが娘のぬれたままの体に肌着を着せてやった。「これで娘は楽になったかもしれない……もう悲鳴を上げることもない……」　涙が、娘の遺体に

落ちた――

⑧ 大人たちに痛めつけられる子どもたち

【毎日新聞朝刊2019/1/15患者の気持ち「告白」匿名・家事手伝い（26）

（私は）10年以上、精神疾患と闘っている。中学から不登校になり、引きこもりになった。長年の自傷行為で、左腕全体はズタボロである。病気になるまで、なぜ痛い思いをしてまで自分を傷つけるのかは理解できなかった。（略）異変のきっかけは両親の不仲だった。特に父から私への暴言と暴力がひどかった。今でも頭を触れられそうになると、手を振り上げる父の姿が重なってしまう。目を強くつむり、体を硬くして痛みに耐える形をとってしまう。両親はその後、離婚し、母は再婚したが、その再婚相手（義父）が陰で私のことを「お荷物」と話していたことを知り、失神した。

（略）今は息をひそめながら家事手伝いをしている。（略）同じように苦しむ人を救いたい。（略）勇氣を出して筆を執った。】

【毎日新聞朝刊2019/2/14 神奈川

横浜市金沢区の自宅マンションで昨年1月、父親を包丁で刺して殺害したとして殺人罪に問われた少年（19）に、検察は懲役5年以上10年以下の不定期形を求刑した。一方で弁護士側は父親の長年にわたる虐待やDVから引き起こされた事件で、母親を守ろうと犯行に及んだとして少年院での更正が相当と訴えた。】

【毎日新聞夕刊 2019/3/13 社会】

東京都練馬区のアルバイト・木島祐太さん（32）は、母親の再婚で同居するようになった継父に、小4のころから虐待を受けた。風呂の水に顔を押しつけられる。頭にビニール袋を被せられて正座をさせられ、エアガンで撃たれる。ライターの火でやけどをさせられる。棒でたたかれて全身にミミズ腫れができ、「お前なんか生きてる価値はない」

小5のとき、近所の交番に駆け込んだ。だが、迎えに来た両親は「悪いことをした息子のしつけのためだ」と言い張り、家に連れ戻された。小中学校の担任や校長に虐待を告げたが、継父と面談した後、教師から「お前が悪い」

近所の大人たちが児童相談所に通報してくれ、中3のとき、児童養護施設に入所した。心的外傷ス

トレス障害（PTSD）やうつと診断され、今でも相手とコミュニケーションが取れない。】

【毎日新聞朝刊 2019/3/24 人生相談（32歳女性）】「原文…ですます体」

小学生のころ、塾で成績が悪いと母に殴られた。床に踏みつけられたり、包丁を突きつけられたり。子どもを虐待するまで追い詰められる母親を独りでも救いたいと、私は精神科医になった。近く結婚することになったが、結婚式をしたくない。母への感謝の手紙を読みたくないからだ。】

暴言を吐き散らし、暴力を振るう側は楽しい。世の中にはそれを楽しむ人が多いのだ。そして、しつくと称して自分の残虐行為を正当化する。決して自分が悪いことをしているとは思っていない。正義の鉄拳を振るっていると思っている。たいていそんな人は、体力や権力を持っているのだから、しまつが悪い。家庭内では、親が親権という権力を振り回し、やりたい放題だ。

力のない子どもたちができることは、すねて自室に閉じこもることぐらいだろう。親から「お荷物だ！」、
「お前は生きてる価値はない」などと見放されたら、

もう自殺するしかない。中には強く反発し、反抗することもある。そして親子の関係、あるいは夫婦の関係には、月日が流れれば、体力的に力が逆転することが必ずあるものだ。そのとき、立場も逆になる……。

ここに挙げた例では、子どもの側がどんな悪さをしたのかは不明確だが、何らかの要因が子ども側にもあるのは確かだ。教師から「お前が悪い」と言われた例では、親の言うことを聞かないなどの、親たちをイラつかせるような要因があったのだろう。教師にしても、大人の立場で考え、大人の理屈で判断するから、大人の親に味方する。

子どもは自分の好き嫌いによって判断しがちだから、気まぐれだ。大人にとって理解不能の行動に走ることもさえる。とんでもないいたずらをすることもあるから、そのときは叱る必要がある。

しかしながら、それを注意する側の親の言い方に、説得力を欠く場合がけっこう多い。親は、子どもにとってわけのわからない作法や考えを押し付けるものだろう。少し賢い子どもは、親の屁理屈には賛同できないし、理不尽な指導に従いたくない。自分勝手な親たちは、腹立ちまぎれに、自分の意のままにならない子どもに、存在を否定することまで言い放つ。「こんな

子を生むんじゃないか」

そんなことで、言いつけにそむく子どもたちは、怒り狂う母からは罵倒され、メンツを重んじる父からは「きついお仕置き、(体罰を加える)」をされるに違いない。彼らは何度もお仕置きするが、ぜんぜん効果がないうし、効果がないことに気づかないから、お仕置きがエスカレートしてゆく。お仕置きが「こらしめ」になり、こらしめが折檻せうかんになり、折檻が暴行になってゆきますます人道に逸脱してゆく。

結局、子どもたちは、体だけでなく、神経や精神にもダメージを受ける結果になっている。彼らは、あんな暴力親の血が自分の体の中に流れていると思うと、ぞっとする。自分は呪われているにちがいないと思ひ込む。(呪われているのはあなただけではいけない)最後に引用した記事は、人生相談の質問者の内容の一部だけであり、回答者の記述について知りたい方は当日の新聞を参照されたい。

⑨ アイドル少女をどやしつける

【毎日新聞夕刊 2018/10/11 社会

愛媛県松山市の16歳、アイドルグループで活動

していたが、3月21日に自殺。パワハラや苛酷な労働環境で、精神的に追い詰められたためとして、所属していた会社を提訴した。】

【毎日新聞夕刊2018/10/12 社会

地方アイドル自殺で遺族が事務所を相手取り提訴。「辞めるのであれば、1億円支払え」などのパワハラ発言を受けた。】

【毎日新聞朝刊2018/11/14 社会

16歳自殺、パワハラで遺族が提訴した。アイドル過酷な現実があった。

同社に脱退したいと伝えると、「次また寝ほけたことを言えばマジでブン殴る」「辞めるなら1億円払え」

【研修という名目で早朝から深夜まで無給で働いた】

【週刊新潮2018年10/25号

2018年3月20日に大本萌景^{ほのか}さんは母親の幸恵さん(42)と共に事務所を訪ねた。通信制の高校から全日制に転学するための費用約12万円を借りることになっていたが、事務所のスタッフは「お金は貸せない」だった。その日の夜11時に佐々木貴浩社長(50)との電話で「辞めるなら1億円払え!」と言われたとされているが、佐々木社長は否定する。

佐々木氏の話——2019年8月の契約期間満了をもって辞めることはその数カ月前に決まっていた話です。辞めた後は保母さんになりたいとも言っていて、辞めるやめないう話になるはずはなく、辞めるなら1億円というのもありえないのです。

(電話で何を話したかについて) 萌景ちゃんは「全日制の高校へ行くのはやめた」というので、高校に入ったほうがいい、と何度も説得しました。(スタッフ^{タフ}が金を貸さなかった理由について) スタッフは萌景ちゃんが物事を簡単に考えていると感じ、「社長はそんな半端な気持ちでお金を貸すのではない」といった上で、もう一度きちんと考えてから必ず今日中に佐々木社長としつかり話をしなさい」といって、お金の受け渡しを保留したのです。

幸恵さんの話——2015年に萌景はアイドルグループの研修生となり(そのとき13歳)、当初は楽しそうだった。しかし、昨年(2017年)頃から萌景の様子に明らかに変化が見られるようになった。レギュラーの子がどんどんやめていって、新しく研修生がたくさん入って来て、萌景が指導しなければならぬことも増えていき、しんどそうな顔をするが多くなりました。(佐々木社長とのや

り取りに関して) 萌景が携帯をスピーカーにして社長と話しているとき、社長が「誰にもを言いよらんか、わかっとうらんか! おおおおお!」と怒鳴るのが聞こえてきたんです。萌景は泣いていました。その夏に、萌景さんがグループから脱退したいといったとき、事務所のスタッフはLINEで「次また寝ぼけたこと言い出したらマジでぶん殴る」とのメッセージを送信している。】

【毎日新聞朝刊 2019/2/19 社会

アイドル自殺、愛媛県を拠点に活動の「愛^えの葉^はGirls」のメンバーだった大本萌景さん(当時16歳)の賠償請求裁判で初弁論があった。

会社「姿勢をたしなめたことはあったが。パワーハラとは考えていない」】

少女たちをステージで働かせ、学校にもロクに行かせず、稼ぎを搾り取るうとする事務所側の強欲振りがすさまじい。少女を囲い込み、親たちから引き離し、面会も通信も制限していた。規則で縛りつけ、例えばグループ内の規則には「陰口1回につき3万円」の罰則があった。少女が休みたい・辞めたいと言いつせば、頭ごなしに怒鳴りつけ、脅しまくる。例えば、「泣き

言を言うな!」「テメー、スケジュールに穴を開けるつもりか! 契約違反だろ? どうしてくれるんだよ おおお!」などと大声を張り上げる。パワー全開の迫力で、可憐な少女たちを威圧する……。

恫喝することが、少女たちに対して極めて有効な手段になっているのだろう。週刊誌の記事によると、この統括者・佐々木貴浩社長は、芸能事務所だけでなく、酒場(ショーハブ)や飲食店など歓楽的事業を手広く展開している。ピラミッド型組織のトップに立ち、従業員たちに絶対服従を強いている。人使いが荒く、金に汚いから、辞める従業員も多かったという。逃げ出したダンサーがいれば、組織を動かして探し出し、強引に連れ戻したという元従業員の話もある。

例の事務所のスタッフにしても、佐々木社長のやり方をまねたかのように、配下のもものたちには強い態度に出る。辞めたいと言いつ出した萌景さんに発信した「次また寝ぼけたこと言い出したらマジでぶん殴る」というメッセージは典型例だ。佐々木社長はそれを「兄貴分のスタッフが冗談を飛ばしていた」と説明するが、少女に冗談が通じたとは思えない。稼ぎのいい少女を辞めさせたくないという本音がよく表れている。

自殺のきつかけとなったのは、全日制高校へ転学す

るための、12万円の借金の約束が反故にされたことだ。アイドルグループ活動のためには通信制の高校へ行かざるをえなかったようだが、その通信制のコースでは、結局彼女には合わなかった。全日制高校への転学を望むようになって、そのための費用は、事務所から借りられるようになった。佐々木社長は、全日制高校に行きたいという彼女の希望をかなえることに一旦は了承したのだ。

以下、状況を推測する――

3月20日に母と娘がその金をとりに事務所に行ったら、担当のスタッフは、些細な生活態度のことで叱責した上に「社長にもう一度頼め!」と、もったいぶったかのように12万円の手渡しを拒否した。

全日制高校に行くということは、アイドル活動をやめて、学業に専念することだ。4月からの新しい学期が始まるから、3月20日はぎりぎりの期限だったろう。萌景さんは転学するつもりでいたから、谷底に突き落とされたかのように感じたことだろう。

その夜遅くに電話した。社長の好意にすぎない思いだった。「金を用意できなければ、高校に行けません。もうグループも辞めます……」

しかし、佐々木社長はその意向に反発した。萌景さ

んはグループのリーダーであり、辞めさせるには惜しい、と思ったことだろう。契約をたてにハツタリをかせた。「辞めるヤツに金を貸せるか! オマエの場合、契約が2019年8月まで残つとるんやろ。ここで辞めるんなら、1億円払えよおおお!」と怒鳴りまくった。1億円払えないことは、わかつて言っているのだ。

萌景さんはこの社長には逆らえないことがわかっていた。アイドルグループから、抜けだせないことに気づかされた。全日制高校にも進めなくなったことのショックは大きかった。このままでは、もう言われるがままに車での移動とステージでの演技を繰り返すだけ……。出口をふさがれ、完全に追い込まれた。「誰にものを言いよるんか、わかつとるんか! おおおお!」という恫喝の音が、脳裏の底から鳴り響く。眠れなかった。夜が明けるころ、自ら命を絶った――

こんな事務所に12万円を借金したら、それこそ身を売らなければならぬことになったはず、と私は思う。利子で膨らんで、もう返せなくなる……。

しかしながら、どうして萌景さんは12万の金を借金しようとしたのだろう。3年近くアイドル活動して、

12万の貯金もできなかったということだろうか。研修生の身分のまま、ただ働きしていたのだろうか。

華やかなステージの裏で、出演料など、ろくにもらっていないことが推測できる。母親にしても、娘の高校転学のために12万円の金を用意できなかったのか。そして、父親は何をしていたのか、ぜんぜん見えてこない。

⑩ 南青山に児童相談所

【毎日新聞朝刊2018/10/28 一面・社会

児童は迷惑施設？ 児童増設の流れに逆行、差別意識丸出しの住民。

高級ブランド店が並ぶ東京・南青山の一角に児童相談所（児相）を開所する計画に、地元住民の一部が猛反発している。港区は、国から取得した南青山5の用地（表参道駅の南300m）に児相を核とする子育て支援拠点を2021年4月の開所を目指している。今月に開いた説明会では、住民約150人が集まった。参加した女性の一人によると、こんな質問や意見が出た。

「DV被害者たちは生活に困窮していると聞く」

「この周辺のランチの単価を知っているか。1600円位する」

「超一等地のそういうものを持つてくると港区の価値が下がる」

「一時保護所の触法少年たちは、外に出るのか」

触法少年たちの背景に親の養育放棄などの虐待があつて児相が保護する事例もある。説明会では、触法少年に巨額の税金を投入するのは納得できないとの意見も多かった。

参加した女性「住民が区職員に怒鳴り散らす場面もあり、異様な空気だった。反対意見が偏見に満ちていて驚いた」

一部住民が2018年8月ごろから反対の声を上げ始め、「青山の未来を考える会」を結成し、港区に質問状（DV被害の子が近くの区立小中学校に通う可能性があるか、など）を出した。その会長は取材に対し、「土地の価格が大きく下がるリスクがある。不動産所有者が大きな被害を受ける」と主張する。その他の地域でも児相の新設・増設を計画するが、一部では、住民の不安や反対の声のために遅れや計画変更が出ている。】

【毎日新聞夕刊2019/1/7 憂楽帳

南青山で児童相談所を開く計画に一部の住民が反発している。「街のブランド価値が下がる」のだという。街の価値とは何だろう。」

住民たちは強硬に反対して、港区の担当者が説明会を開くたびに紛糾している。収まりがつかなくなっている。南青山という地区に児童相談所が建設されることが、周辺住民にとってそんなに切実な問題になるのだろうか。

風俗施設やパチンコなどの遊戯施設でもない。児童相談所は、区役所（あるいは市役所）の一部門的な存在だろう。れっきとした公共施設であり、福祉的な役割を持つ。それが嫌われるとは……。〈公共施設として、ごみ焼却所、葬送施設、刑務所などもあるけれど〉

その土地は区のものなのだから、公共施設として活用することに、文句は言えないところだ。一生住み続け、売るつもりのない元からいる住民たちにとって、児相の存在など、どうでもいいことだろう。自分たちの暮らしが不便になるわけではない。治安や環境が悪くなるというのも思い込みだろう。

思い込みの第一は、「超一等地の価値が下がる」という考えだ。反対する住民たちは、自分たちの資産の

評価額が下がることを恐れている。彼らは、自宅の土地や建物をやがては転売するつもりなのだ。そのとき人気がなく、安値で売らなければならぬことを心配している。この地に長く住むつもりはないのだ。彼らは不動産投資のつもりで南青山に住居を構えている人たちだろう。超一等地に住んでいると、プライドも高い。児相に出入りする人たちを見下しているところがある。建屋自体でなく、そこに出入りする人たちを嫌っている。南青山は児相に来るようなビンボー人どもがうろつくところではない、と言いたいのだろう。何しろ、ランチが1600円もするのだ。彼らが地域の品格を下げてしまい、ひいては不動産価値を下げると思われる。

反対する動機が自分たちの金もうけにあるのだから、エゴイズム的であり、同情に値しないものだ。〈資産価値が下がるかもしれない〉という心配や、損をするという不安感をもつ住民たちを説得するのは、港区が説明会を何回開いても、無理だろう。児童相談所を受け入れようとしないうような、意地の悪い、品位の低い人たちとは、私は同じ地域に住みたくない。

⑪ 透析治療をしなかった福生病院

【毎日新聞朝刊 2019/3/7 一面、クローズアップ

東京都福生市・公立福生病院で、昨年8月、外科医（50）が都内の腎臓病患者の女性（当時44歳）に人工透析治療を止める選択肢を示し、透析治療中止を選んだ女性が一週間後に死亡した。患者の状態で極めて不良のときなどに限って治療中止を容認する日本透析医学会のガイドラインから逸脱する。外科医は「正気の時の固い意志に重きを置いた」と説明。

女性は去年8月7日に、（診療所で）透析治療を行なった際、シャント（透析のために血管の分路を腕に埋め込んでおくもの）がつぶれたため、2日後の8月9日、福生病院を訪れた。外科医は、①首周辺に管を入れ、透析治療を続ける、②透析治療を中止する、という二択を提示した。「シャントが使えなくなったら透析は止めようと思っていた」という女性には、②を選んだという。透析中止を決めた女性は、意思確認書に署名した。女性は「透析しない意思は固い」「最後は福生病院でお願いしたい」と語ったという。外科医は夫（51）を呼び、看護師にも立ち

会わせ、再度、女性の意思を確認した。夫は迷いながらも中止を承諾した。そこで外科医は「おそらく2週間ぐらいで死を迎えます」と告げた。

8月14日、外科医によると、女性は「息が苦しく、不安だ」「こんなに苦しいのであれば、透析をまたしようかな」と数回話した。外科医は「するなら『したい』と言ってください。逆に苦しさが取れればいいの？」と聞き返し、「苦しいのが取ればいい」というので、女性に鎮静剤を注入した。

8月16日午後5時11分死亡。

夫が毎日新聞の取材に胸中を明かした。「半年過ぎてもダメ」

昨年8月9日、病院から突然呼び出された。見せられたのは透析治療を止める意思確認書だった。いっぺんに力が抜け、受け入れるしかなかった。「透析に疲れちゃったのかな……」

死の前日のことを悔やむ。病室で女性は「撤回したいな」と生きる意欲を見せた。「私からも外科医に頼んでみよう」。そう思って帰宅したところ腹部に激痛が走った。ストレスで胃に穴が開き、炎症を起こしていた。外科医に「透析できるようにしてください」と頼み、同じ病院で胃潰瘍の手術を受けた。

翌16日、麻酔からさめると女性はすでに冷たくなっていた。そして夫は、保管していたスマホのメールを開くと、女性からの次の通信文が入っていた。

8月15日「何時来るの?」

「何時来るの?」

死の当日、16日午前7時50分「とうたすかかか」彼によると、「とう」は夫の愛称、「たすかかか」は「助けて!」と打とうとしたのではないか。「あの時すぐにメールを見ていれば、助けに行つて、透析治療を受けられるようにしてあげたのに。今も生きていてほしかった!」

【毎日新聞朝刊 2019/3/8 一面、社会】

公立福生病院では、13〜17年に終末期以外の患者で透析を行わず20人死亡。治療前に選ばれる。患者団体「本人に判断を迫るのは酷!」

【毎日新聞朝刊 2019/3/10 一面】

公立福生病院で外科医から5年前に提案し、院長が承認していた。】

【毎日新聞朝刊 2019/3/12 社会】

(記者が長男に取材)

8月13日(死亡の3日前)、結婚して独立した長男(28)を突然訪ねた女性は「(透析治療が)でき

ないって言われたから、とりあえず止める」と切り出した。「もしかしたら死ぬかもしれない」。女性の表情は硬かった。翌14日入院。

16日の朝、(見舞ったとき) ともに会話ができない。いやな予感がした。長男によると、外科医は「容体が今後急変することがあるが、何もできない」と長男に告げ、強い鎮静剤を打った。30分だけ、話ができた。初孫の写真を、長男は女性に見せた。「お前に似ているよ」。女性は薄く笑いつぶやいた。「もう死ぬから、後のことをよろしくね!」

【毎日新聞朝刊 2019/3/13 一面】

公立福生病院で、2014年ごろ以降外科医(50)から治療を止める選択肢を提示され、透析中止した5人(前掲の記事の女性を含む)のうち、4人が死亡した。これとは別にこの病院では13年4月〜17年3月に、最初から透析治療をしない非導入で計20人死亡したことがわかっている(後に17人と訂正)。

福生病院の外科医(氏名は公開されていない)は、シャントがぶれたために再建手術を受けに来た女性患者に、〈透析を中止すること〉を選択肢に挙げ、結

局それを決意させた。女性は家族と相談して決めるべきだったか、と私は思う。

「おそらく2週間ぐらいで死を迎えます」と告げた彼は、一度の決意を盾に、その後の透析再開に応じなかった。本人の要望にも、その夫の頼みにも、耳を傾けなかった。医師としての職責を果たしていなかった疑いがある。そして人命軽視の疑いだ。透析患者の数を減らす意図があったかのような。

この女性の場合、透析中止後、急激に容態が悪くなっている。最終の透析は8月7日だったというが、このときにシャントがつぶれていて、うまく透析できていなかったのだろう、と私は推測する。それはともかく、腕のシャントがつぶれたら、首周辺に管を入れるしかないのだろうか。

医療の専門家でもない私だが、もう一本の腕や、足ではだめなのか、という思いを持つ。他日の新聞記事では、他の専門医が腹膜液での治療方法もあると指摘していた。あるいは、腎臓移植という方法も考えられるところだ。日本での移植は長く待たされるといっけれど。

この外科医は、二択で患者に決断を迫ったことが問題になっている。そのひとつが「死ぬこと」なのだから、この選択は重すぎる。透析中止は自殺的な行為になる。44歳の若さだったから、死ぬのは早すぎる。問題の外科医は、その患者の自殺を手助けしたことになる。終末期の患者ならともかく……。

外科医は「透析治療患者は終末期にある」と主張しているが、透析治療を続ければ、何年も生きられる人を終末期にあるとは言えない。この女性はふだん別の診療所で透析をしていたが、シャントを再構築するために福生病院を訪れたが、外科医は「透析をやめますか？」という選択を迫った。シャントを再構築するか、それができないなら、他の透析方法を提示するのが外科医の仕事だろう。「透析をやめますか？」という選択肢を提示するのは、普通の病院では、ありえないことだろう。そして、外科医は女性患者に「透析継続は困難だ」と示唆し、つまり「透析できない」と思い込ませた。

過去にうつ病をわずらい、自殺願望があった女性は、生きることに執着していなかったようだ。「いつ死んでもいい」ぐらいの心持だったと思われる。外科医にほとんど誘導されるままに、このとき、その場で、死ぬほうを選んでしまった。外科医によると、その決意は固かったという。その意思が変わらぬうちに、外科

医は意思確認書に署名もさせて、しつかりと言質を取った。遺族となるだろう夫にも、承諾させた。

動揺していた夫は、確固とした態度の中年外科医にその意思確認書をみせられ、説得させられた。「本人がそう希望するなら、しかたない」と思い込んだ。透析するにしても心身に負担が大きいから、夫は妻のこれまで苦勞していたことを知っていたので、そう思ったかもしれない。このとき、夫は外科医に言われるままに承諾しており、肝心の妻の本当の意思をよく確かめていなかったわけだろう。

しかし、女性も夫にしても、死を選択する意思は、ほんの一次的なものだったとみえる。彼女の心は揺れ動いていたと察するべきだ。しかたがないというあきらめと、でも医者には何とかしてほしい、という気持ちの動きがうかがえる。けれども、外科医は、その心変わりに気づきもしなかったし、その声を聞くこともしなかった。

13日、女性は息子の家を訪れた。自分の死の可能性を息子に告げた。けれど、息子は死が目前に迫っていたことに気づかなかったという。そして透析治療すれば救える命だったことも……。

14日に入院した女性は、外科医に「こんなに苦し

いのであれば、透析をまたしようかな」と、数回にわたって再開の是非を問うたのに、外科医は再開に応じることがなかった。外科医は、容体が悪くなる苦痛にかこつけて、鎮静剤で黙らせていたりしていた。

15日には女性は、意識はあるのに、おそらく管を入れられたり酸素吸入させられたりして、声を上げることもできなくなっていた。できたのは指先でメールを発信することだけだった。そのメールが届くこともなかった。夫は、事態の急変で心痛のあまり、胃潰瘍を発症し、緊急手術を受けていたのだから……。でも、夫は手術を受ける前に、外科医に「透析できるようにしてください」と頼んでいた。その頼みを外科医は忘れてしまったか。

結果的に、外科医はそれを聞かなかったことにした。家族の頼みなどよりも、本人の意向を尊重したわけだ。何よりも、意思確認書というお墨付きがある。話す言葉より、書いた文言の方が確かなのだろう。外科医は「正気の時の固い意志に重きを置いた」などと言いつけている。彼にとつて、その後の女性の要望は「うわごと」にしか聞こえなかったのだろう。私は、女性が死ぬ前日まで「正気」だったと推察するし、それを一番よく知っていたのは家族だろう。

16日午後5時11分死亡した。